

【随筆・終生書生気質編】

この母ありて この子あり

北信のとある公共入浴施設でのことである・・・

幼子が、臨席の家族の幼子が、膝が曲がらないとか腰が痛い高齢者のための座椅子を利用しているのを真似て、「僕も！」と座椅子置場に行き、幼子にとっては手に負えない座椅子を引っ張りだしてきた。母親はこれに気がつくや幼子に駆け寄りこれを諫めた。幼子は「何で諫められるのか？」理解できないようであったが、母親は静かに「あなたは、このようなことはしてはいけない」と諭しているようである。幼子は今にも泣きそうな顔をして母の諭しに従い、幼子は座椅子を元の置場に漸くもどした・・・

座椅子を元の場所に戻し終えると、何と幼子は母の懐に飛び込み母の胸に縋った。母親も温かくこの幼子を抱擁し、母親は幼子の頭を何遍も何遍も撫でて、更に母親は幼子の耳元で何かを囁き子もこれに頷いていた。母の諭しを聞き分けた男子（おのこ）の一分を褒めているように私には映った。

屹度、躰の厳しい流れをくむ家庭なのであろうか。祖母も傍らでこの母子の行動を温かく見守って一言も喋らないでいた。母の教えに従うこの子は、素晴らしい家庭環境に恵まれていると感じた。この若き母の我が子に教える「男の矜持とは」の教えに心打たれた。

暫くすると、子に何ら諭しもしなかった家族は、案の定座椅子や肘掛を定位置に戻しもせず、テーブルの上も整理しないで大広間を退出して行ったが、「躰」の大切さを改めて見せ付けられた一コマであった。公のものを利用したら、さり気なく次の利用者の為に元に戻す。この当然のマナーを、親が知らないから子も出来ないと思える。これも一の「負の連鎖」と言えまいか。如何に「躰」という後天的な教育が大切かと知らされた思いである。偶々遭遇した対照的なこの二人の幼子の将来は明らかに差が生ずると感じる。

公共施設の大広間には様々な人が集まる。様々な人間模様が映し出される。この場は湯っ蔵んど然り、紅葉荘、湯ったり苑然り、今日訪れた白鳥園も亦然り。大広間での人間観察は実に味わい深いものがある。入浴もさることながら、大広間での人間観察は得るところが大きい。

平成 28 年 4 月 10 日記す